



Title	日本語からブラジル・ポルトガル語への翻訳に見られる「役割語」の対応手法とその必要性：「武士ことば」を例として
Author(s)	デ ナザレ フィゲイラ, フラヴィオ
Citation	Anais : Coloquio de Estudos Luso-Brasileiros. 2020, 48, p. 17-33
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78954
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

日本語からブラジル・ポルトガル語への翻訳に見られる「役割語」の対応手法とその必要性 ―「武士ことば」を例として―

デ ナザレ フィゲイラ フラヴィオ

1.はじめに

日本語は「役割語」が豊富である。「役割語」は、人称代名詞のバリエーションや文末表現などによって表現される。そのため、ブラジル・ポルトガル語のような言語には翻訳しにくい要素と考えられる。本稿は日本語からブラジル・ポルトガル語への翻訳に見られる「役割語」の対応手法を記述的に考察し、さらに、翻訳における「役割語」への配慮の必要性を示すことを目的とする¹。

今回の調査では「武士ことば」を例として、日本語の「役割語」がブラジル・ポルトガル語にどのように翻訳されているかを示しながら、フィクションにおける「巨視的コミュニケーション」と「微視的コミュニケーション」の観点から、「役割語」の翻訳における必要性を考察する。

2.先行研究

2.1.「役割語」とは

「役割語」とは金水（2000・2003）によって作られた概念で、次のように定義される。

「ある特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を聞くと特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）を思い浮かべることができるとき、あるいはある特定の人物像を提示されると、その人物がいかにも使用しそうな言葉づかいを思い浮かべることができるとき、その言葉づかいを「役割語」と呼ぶ」。

（金水 2003: p.205）

¹ 本稿は、筆者の修士論文（未公開）の一部に基づき、データを再分析した上で作成されたものである。

役割語は言語位相差²と異なり、実際に使われている自然な言葉遣いとして存在するわけではなく、「仮想的（ヴァーチャル）」な言葉遣いである（金水 2003: p.37）。役割語とは言語上のステレオタイプであるという（金水 2003: p.35）。

ステレオタイプという用語が一般的に使われているが、ここでまず何の意味で用いられているかを明らかにする必要があると考えられる。そこで、松井・上瀬（2007）と金水（2003）が参考になる。松井・上瀬（2007）はステレオタイプについて次のように述べている。

「**ステレオタイプ**（stereotype）とは、人々を分けるカテゴリに結び付き、そのカテゴリに含まれる人（成員）が共通してもっていると思われる特徴のことである。（…）ある集団の人々に対するものとして社会に普及している知識、イメージ、信念と言い換えることが出来る。」

（松井・上瀬 2007 : p.55）

松井・上瀬（2007）によると、「（…）ステレオタイプを用いれば思考する努力を節約することができる」という（2007 : p.59）。金水（2003）はステレオタイプ、偏見、差別を次のように分類している。

「（…）ステレオタイプとは、混沌とした外界を整理しながら把握していく人間の認知特性と結びついた現象であるといえよう。認知とはすなわち外界に関する認知の処理のことをいうのである。一方、ステレオタイプに関する知識が一定の感情（主として否定的感情）と結びつくとき、その

² 田中（1999）は「位相・位相差」を次のように定義している。

「ことばには、性別や世代の違いによって、あるいは社会階層・職業などの違いによって、さまざまな差異や対応がみられる。（…）社会的な集団や階層、あるいは、表現上の様式や場面それぞれにみられる、言語の特有な様相を「位相」と言い、それに基づく、言語上の差異を「位相差」と呼ぶ。」（田中 1999 : p.1）

このように、「位相差」は実際に社会に存在する言語の様々な様相を指す。それに対して、「役割語」はフィクション作品におけるステレオタイプの言葉遣い（金水 2003 : p.35 参照）を指す。

知識と感情のセットこそが「偏見」であるといえる。また、偏見が特定の行動と結びついて、偏見を持たれた人間にとって不当な結果を招くとき、その行動を「差別」という。」（金水 2003: p.35）

上記の説明から分かるように、ステレオタイプは偏見や差別に繋がる可能性があるが、ステレオタイプそのものは、人間の認知的な処理の自然な現象であるといえる。そして、概念としては、ステレオタイプ、偏見、差別は異なるレベルの現象として、つまり「認知的」なレベル、「感情的」なレベル、「行動的」なレベルに分けることができる。

ステレオタイプという用語はこのような意味で用いられる。そして、役割語はステレオタイプの言語的な側面として見ることができ、この意味で役割語は「言語上のステレオタイプ」（金水 2003 : p.35）であると言われる。役割語の例として次のようなものがある（金水 2011 : p.170）³。

例1.

- a.そうよ、あたしが知ってるわ
- b.そうじゃ、わしが知っておる
- c.さよう、拙者が存じておる
- d.そうだよ、ぼくが知ってるのさ

金水（2011）によると、「言葉遣い（スタイル・方言）と人物像（のステレオタイプ）の心理的連合関係（に関する知識）が存在するとき、その言葉遣いのことを役割語と呼ぶ（…）」（2011 : p.170）という。

例1のaからdに見られるように、それぞれの言葉遣いが一つの人物像（女性、老人、武士、男性）と結びついていると言える（金水 2011 : p.170 参照）。そして、その言葉遣いに見られる人称代名詞や文末表現などのような語彙的・文法的な特徴によって人物像が表現されている。だが同時に、まさにこの語彙的・文法的特徴によって、翻

³ 金水（2011 : p.170）から引用した例文である。下線は筆者によるものである。

訳において役割語が一つの障害になるとも考えられる。これからその役割語と翻訳の関係について紹介する。

2.2. 「役割語」と翻訳の関係

役割語と翻訳（マスメディア）の関係について金水（2000、2003、2011）と中村（2013）に既に指摘がある。金水（2000）は、役割語の知識はメディアを通じて拡散、増幅、定着、そして固定されていく（2000：p.330）と述べている。また、中村（2013）は翻訳もメディアを通して、役割語の維持と普遍化に役割を果たしていると述べている（2013 pp.71,80）。

金水（2011）は役割語が翻訳の中でどのような機能を果たしているかについて次のように述べている。

「役割語を適切に使用すれば、人物像や情景や作品の意図までもが、極めて効率的に表現されるであろうし、また読み手は、そういった面での安定感を求めている。しかし、ありふれた役割語に身を委ねてしまえば、作品が薄っぺらで通俗的なものに流れてしまう危険性も絶えず存在する。」（金水 2011：p.178）

故に、役割語は翻訳のプロセスを助ける手法として見なすことが出来るが、その使用が不適切であれば、むしろ原作の雰囲気などを崩してしまう恐れがあると考えられる。このように、役割語と翻訳は緊密な関係を持つことが明らかになったが、一方で元々どうして役割語を翻訳する必要があるのかという疑問も生じる。それに関しては、山口（2007、2011）が提案している「巨視的コミュニケーション」と「微視的コミュニケーション」の概念が参考になる。

山口（2011）によると、「巨視的コミュニケーション」と「微視的コミュニケーション」は次のように定義されている。

「作品世界内の登場人物同士のやり取りは、作品という小世界内での伝達なので微視的コミュニケーション（microcosmic communication）と名付けた。これに対し、作者から読者（観客）への伝達は、作品の小世界の枠

を超えるものである。巨視的コミュニケーション（macrocosmic communication）とした。」（山口 2011：p.29）

微視的コミュニケーションと巨視的コミュニケーションの関係は次のようにまとめられる。

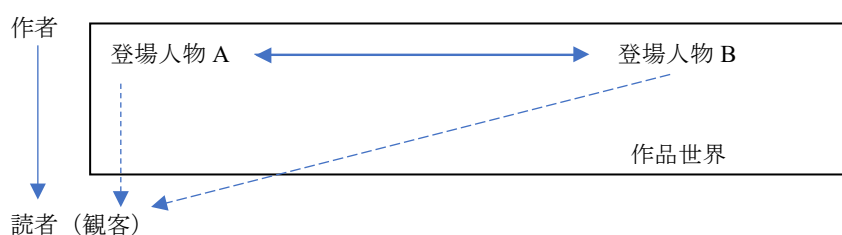


図 1 フィクションの語りにおけるふたつのコミュニケーション（山口：2011：p.29）

山口（2011）によると、「（…）横方向の矢印が微視的コミュニケーションを表し、縦方向の矢印は巨視的コミュニケーションを表す。留意すべきは縦方向の破線の矢印である。登場人物のせりふは対話者に向けられると同時に、それを傍で聞いている格好の観客にも向けられている」（2011：p.29）と述べられている。

山口（2007）によると役割語は巨視的コミュニケーションのレベルと関わっていると考えられる（2007：p.22, 23）。このように、役割語はキャラクターの間のコミュニケーションだけではなく、作品世界の外、つまり読者への伝達にも関わっているのである。故に、フィクション作品のセリフに見られる役割語の出現は読者にキャラクターの役割などを伝えているのである。従って、翻訳の際、その役割語に対応する要素がなければ、原作に見られるセリフの全体的な意味が伝えられないことになると考えられる。そのため、翻訳においては、役割語への配慮が重要になる。

言語表現のレベルで日本語の役割語が翻訳に障害の一つになると考えられることもあるが、逆に言えば、役割語を考えることによっ

て、従来の翻訳で、日本語の代名詞のヴァリエーションの問題のように、一語ずつの問題として認識されていたものがより広い現象として捉えられるようになると考えられる。

故に、語彙的、文法的な特徴によって表されている日本語の役割語が外国語に翻訳される時は、様々な語彙的、文法的な特徴によって対応することが可能になると考えられる。本稿では微視的コミュニケーションと巨視的コミュニケーションの関係のために、翻訳に役割語への配慮がなければ、原作の意味が曖昧になる例を挙げながら、ブラジル・ポルトガル語への翻訳を考察する。

3.研究方法

今回の調査では『るろうに剣心-明治剣客浪漫譚-』という漫画作品に見られる「武士ことば」の翻訳を考察した。分析のために、作品の第11話「リボンとわがまま」、第12話「人斬り二人」、第13話「志士名の由来」、第14話「月下終焉」というエピソードから全登場人物のセリフを収集し、データベースを作成し、原作と翻訳のセリフを比較した。エピソードから収集されたセリフの数は411個である。その中で「武士ことば」を使うキャラクターのセリフは106個である。更にその中で役割語が見られるセリフは61個であり、翻訳版で役割語が対応していると見られるセリフは48個である。なお、セリフの数は、次の基準の下で行われた：

- ①「セリフ」は「吹き出し」で数えるのではなく、「文」で数える。
- ②句読点「。／？／！」は「文」の区切りとして見られるが、漫画では「。」が用いられないことが多い。句読点がない場合、終止形や終助詞や助動詞で判断する。
- ③テ形で終わる文は同一の「吹き出し」に続きがなければ、独立したセリフとして数える。または依頼文のテ形も独立したセリフとして数える。
- ④複文の場合では、主節と従属節が二つ以上の「吹き出し」に分けられている場合でも、一つの「セリフ」として数える。

⑤一つの「吹き出し」は、「文」が接続詞・接続助詞（例：しかし、けど、が、だが、でも、それから）で始まるとき、一つのセリフとして数える。

⑥文が倒置するとき、二つ以上の「吹き出し」の場合でも、一つの「セリフ」として数える。

⑦感動詞や呼称は句読点「。／？／！」が付いている場合、または一つの「吹き出し」に独立している場合は、一つのセリフとして数える。

⑧キャラクターの言葉は何かの直接引用をする場合は、その引用は一つのセリフとして数える。

金水（2003: pp.205-207）によって提案された役割語の言語的な特徴を参考し、役割語のマークを 1 一人称（キャラクターの自己呼称）、2 文法、3 音形の写し方、4 語彙、5 呼称、6 その他という 6 つのカテゴリーに分けて分析を行った。金水（2003）が述べているように、「標準語」という概念は役割語のためにはとても重要である⁴。そのため、本研究では、翻訳の文の中で「標準語」から体系的に離れている要素を役割語の分析の中心の対象としてとらえる。

4. 「武士ことば」の翻訳の分析

ここで考察する作品の『るろうに剣心-明治剣客浪漫譚-』とは明治時代初期の日本を舞台とする少年漫画である。幕末頃に伝説の人斬りとして活躍していたが、明治時代に流浪人として自分の過去の罪を償おうとする主人公の「緋村剣心」を中心とするファンタジー歴史物語である。主人公は次のように「武士ことば」を用いる。

⁴ 金水（2003）によると、「標準語」は「現実の社会に現象として現れる言語としてではなく、われわれの概念・知識として捉え」（2003 : p.64）られると言う。このように、「標準語」は役割語にとって「原点、基準点のような性質をもっている（…）」（金水 2003 : p.67）ものになる。ブラジル・ポルトガル語では、Bagno（2015）が述べる「共通規範（Norma-Padrão）」の概念が有用だと考えられる。Bagno（2015）によると、「共通規範（Norma-Padrão）」は規範文法の伝統によって普遍化された言語イデオロギーである（2015 : p.319）という。そのため、翻訳で標準語・Norma-Padrão から体系的に離れる要素が「役割語」の対応手法と関わる可能性が高いと考えられる。

例2. 「礼を言うのは拙者の方でござる」⁵

(『るろうに剣心-明治剣客浪漫譚-』第2巻 p.166)

主人公の緋村剣心のセリフでは一人称代名詞の「拙者」と文末表現の「でござる」が使用されている。『〈役割語〉小辞典』（金水 2014a）では、拙者」は「主に、〈武士ことば〉として広く知られている。」と述べられている（2014a: p. 110）。一方で、「ござる」については『〈役割語〉小辞典』では「古い時代の日本語を代表する役割語として、〈武士ことば〉を挙げることができるでしょう。「拙者」「ござる」「申す」「存ずる」「いたす」などの特徴的な語彙が含まれます」と述べられている（金水 2014b: p. xii）。従って、これらは「武士ことば」の役割語と考えられる。主人公の言葉遣いの特徴では次のようなものも見られる。

例3. 「脇差一本まして左手しか使えないお主にもう勝機はござらん」

(p.159)

二人称代名詞として「お主」が用いられ、「ござる」の未然形に否定を表す助動詞「ぬ」⁶の変化した形「ん」が見られる。『〈役割語〉小辞典』によると、「お主」は「ポップカルチャーの世界では、武士・剣士や老人のキャラクターが使用する（〈武士ことば〉〈老人語〉）」とされる（岩田 2014a: p.50）。そして、「ぬ」について「医者、政治家、大学教授などの地位や教養のある年配の男性の話し言葉によく「ん」が用いられる（〈老人語〉〈上司語〉）」（金水 2014c: p.215）とされている。一方でヒロインに対して主人公の緋村剣心は次のような敬称を用いる。

例4. 「帰るでござるよ薫殿」 (p.165)

⁵ これから見られる全ての日本語の例とその翻訳はそれぞれ『るろうに剣心-明治剣客浪漫譚-』第2巻と *Rurouni Kenshin- Crônicas da era Meiji. Volume 2.* から取られた例である。紙幅のため、ページ数だけを表示する。

⁶ 「古典語の打ち消しの助動詞「ず」の連体形が終止形として使われるようになったもの」（岩田 2014 : p.146）

主人公の言葉遣いに代名詞の「拙者」が見られるが、この人称代名詞については、『広辞苑』（第六版）によると、「主に近世、武士が自分のことをへりくだっていう語」という（岩波書店 2008 電子版）。そして、敬称の「殿」については、「他人の氏名・官名の下に添えて敬意を表す語」（岩波書店 2008 電子版）と説明されている。このことから、ここでは、「武士」の人物像を表しながら、自分を卑下し、他人を尊敬する様子が表されていると考えられる。しかし、場面によっては、このキャラクターは「武士ことば」を止め、次のような「男ことば」を使うこともある。

例5.「俺が殺すと言った以上お前の死は絶対だ」（p.138）

主人公の緋村剣心のセリフに見られる役割語の二つの用い方が物語と緊密に繋がっていると考えられる。「武士ことば」を用いる人物像は過去の罪を償うために、明治時代に流浪人になった人物であり、「男ことば」を使う人物像は幕末に活動した人斬りである。このような設定は役割語のシフトによって実現されている。このシフトは翻訳の際にも非常に重要となる。

最初に主人公が使う「武士ことば」に対して次のような翻訳が見られる。

例6.「拙者は維新後十年人を斬り殺すことを自らに禁じた」（p.91）

例 6(a) 「Este servo proibiu a si mesmo de
この 従者 禁じる-PST-3sg. PREP REF.PRO 同一 PREP
matar pessoas, e isso já faz dez anos.
殺す-INF 人 CONJ それ もう 経つ-3sg. 十 年間（p.91）

「武士ことば」の役割語として一人称代名詞の「拙者」が見られる。翻訳版では、自己表現として *este servo* が使われている。ポルトガル語では一人称代名詞の単数としては *eu*（私）という単語しかない（斜格の *me, mim* を除き）。しかし、ここでは指示代名詞の *este*（この）と名詞 *servo*（従者）の組み合わせによって作られた表現がセリフの話し手を表している。

Servo という単語は「他人に従う者」などを意味する。話し手が用いると自己を卑下する表現になる。更に、この表現を使用することによって、動詞の活用にも変化が起きる。一人称に一致する動詞の活用形から三人称に一致する動詞の活用形に変化することになる⁷。

指示代名詞の *este* と名詞の *servo* の組み合わせによる表現は名詞 *servo* の語彙的な意味によって、話し手は自己を卑下する表現を実現すると考えられる。そして、三人称による動詞の活用を用いることで、主観性を持つ一人称から離れ、話し手の意志を間接的に伝えられるようになるとも言える。こうした二つの特徴から「自分のことを謙る」という意味の「拙者」に対応する表現が実現されるのである。このように、原作に現れる「武士ことば」の役割語が翻訳版でも対応していることがわかる。

一方で、原作に「ござる」という表現しか現れていないセリフの場合でも、翻訳版では *este servo* という表現が見られる。

例7. 「その代わりと言ってはなんだが一つ頼まれて欲しいでござるよ」
(p.92)

例 7(a) 「Por outro lado... este servo gostaria de pedir
PREP 他 側面 この 従者 好く-COND-3sg. PREP 頼む-INF
um favor ao senhor.」
ART お願い PRE+ART あなた (敬称) (p.92)

例 7(a)では必ずしも主語を表現しなくとも、文の意味は十分伝えられると考えられる。但し、動詞の *gostar* (好く) は条件法に活用しており、一人称と三人称が同じ形式 *gostaria* になるため、主語が現れないと、一人称と理解される可能性がある。そのため、主人公の言葉遣いの設定から外れないように *este servo* という表現の使用が必要になる。今回の調査で、原作に「拙者」が現れなくても、*este servo* という表現が出現するセリフは多少見られる。

⁷ もともと三人称の表現である *este servo* に一致するために起こってしまう動詞の活用である。

原作における「殿」という敬称も主人公の言葉遣いの特徴である。「殿」という敬称を役割語として捉えるべきかどうかは問題であるが、ここで観察した4つのエピソードに現れる5つの登場人物の中で「殿」という敬称を用いるのは主人公だけである。故に、このキャラクターの言葉遣いの特徴と考えられる。このような呼称は次のように翻訳されている。

例8. 「薫殿 左之と喧嘩でもしたでござるか それとも弥彦」 (p.101)

例 8(a) 「Senhorita Kaoru... A senhorita brigou
お嬢さん (敬称) 薫 ART お嬢さん 喧嘩 -PST-3sg.
com o Sano? ou foi com o Yahiko?
PREP ART 左之 CONJ コピュラ-PST-3sg. PREP ART 弥彦 (p.101)

例 8 では、文末表現「でござるか」と敬称の「殿」が注目される。それに対して、翻訳版では、「でござるか」に対応するものはないが、敬称の「殿」に対して、敬称の *senhorita* (お嬢さん) が見られる。前述のように、主人公のセリフでは二つの役割語が用いられている。つまり、「武士ことば」と「男ことば」である。キャラクターの使う役割語に対応して、翻訳版でも訳し分けられている。敬称 *senhorita* の使用もそれに対応したものである。

ここで、主人公の役割語のシフトを観察する前に、この物語の大筋を簡単に紹介する。下記のシーンでは悪党の「鵜堂刃衛」が主人公の緋村剣心を怒らせるために、ヒロインの「神谷薫」を誘拐する。怒った主人公が「武士ことば」を止め、「男ことば」を使い始める。(紙幅のため、会話の一部省略する。)

例9.i 神谷薫 「剣心！」
ii 鵜堂刃衛 「いい目だ」
iii 鵜堂刃衛 「怒ってるな」
iv 剣心緋村 「ああ」
v 剣心緋村 「薫殿まで巻き込んだ貴様とそれを阻止出来なかった
俺自身にな」

- vi 神谷薫 「俺・・・？」
 vii 鶴堂刃衛 「上等上等言葉遣いが幕末の頃に戻っている」
 viii 鶴堂刃衛 「あとはそのけったいな刀の刃を返せばそれで伝説の
 人斬り様の復活だ」 (pp.113-115)

この会話の中では二つのポイントが注目に値する。一つは主人公の役割語のシフトである。もう一つは言葉遣いの変化が他のキャラクターによっても示されるという点である。つまり、役割語のシフトは微視的コミュニケーションのレベルで表現され、物語と緊密に繋がっていると見られる。そのため、役割語へ対応した訳がなされないと、会話の意味が曖昧になる恐れがあると考えられる。例 9.v を観察すれば、これは明らかになる。

例 9.v

「薫殿まで巻き込んだ貴様とそれを阻止出来なかった俺自身にな」 (p.114)

例 9.v(a) 「Estou furioso porque você colocou
 コピュラ-1sg. 怒った(ADJ) CONJ あなた 巻き込む-PST-3sg.
 a Kaoru nisso... e porque Eu não
 ART 薫 PREP+それ CONJ CONJ 私 いいえ
pude fazer nada para protegê-la.
 できる-PST-1sg. やる-INF 何モ PREP 守る-INF+彼女 (p.114)

ここでは、代名詞の「俺」が用いられ、文末表現の「でござる」が用いられなくなる。翻訳版でも、主人公の言葉遣いに見られた *este servo* という表現が用いられなくなる。その代わりに一人称代名詞の *eu* とそれに一致する動詞の活用形が見られる。この手法によって、原作の役割語のシフトに対応していると考えられる。

更に、役割語のシフトを強調するために二つの要素が作用していると考えられる。一つは一人称代名詞の *eu* の表記に見られるフォントの使用である。このセリフでは、*eu* という単語だけが太字と斜体で表記されている。もう一つの要素は主人公がヒロインに対して用いる呼称のことである。原作の主人公のセリフではヒロインの薫に対して

「殿」という敬称が用いられているが、翻訳版では敬称の *senhorita* が用いられなくなる。原作で「男ことば」が用いられるのに対応して翻訳に敬称が現れなくなると考えられる。

最後に、主人公の役割語のシフトについては、もう一度物語の中で微視的コミュニケーションのレベルで注目される場面がある。人を二度と殺さないと誓った主人公はヒロインを救うためにその誓いを破りそうになるが、ヒロインが主人公を止めるシーンである。このシーンの会話が次である。（紙幅のため、会話の一部省略する。）

例10.

i 薫 「剣心！！」

i(a) Kaoru 「Kenshin!!」

剣心

ii 薫 「人斬りに戻らないで・・・」

ii(a) Kaoru 「Não volte a ser um retalhador…」

NEG 戻る-IMP-3sg. ART コピュラ-INF ART 人斬り

(ヒロインが気絶する)

iii 剣心 「薫殿！」

iii(a) Kenshin 「Senhorita kaoru!!」

お嬢さん 薫

iv 剣心 「大丈夫でござるか？！」

iv(a) Kenshin 「Fale com este servo!」

言う-IMP-3sg. PREP この 従者

v 薫 「大丈夫でござるよ 剣心」

v(a) Kaoru 「Está tudo bem com esta serva...senhorito kenshin.」

コピュラ-3sg. 全て 良く PREP この従者 氏 (敬称) 剣心

vi 薫 「言葉遣いが・・・元に戻っている」

vi(a) Kaoru 「Você está falando como você sempre fala…」

あなた AUX コピュラ-3sg. 話す-PROG CONJ あなた いつも 話す-3sg

(pp.155-158)

戦いのシーンで「男ことば」を使用していた主人公はヒロインの薫と話し始めると、再び「武士ことば」を用いるようになる。こうした役割語のシフトは翻訳版にも見られる。敬称の *senhorita* と *este servo* という表現も再び用いられるようになる。原作に「拙者」という単語が出現しないにもかかわらず、翻訳では *este servo* という表現が見られる。それは原作の「ござる」に対応するために使われていると考えられる。故に翻訳者は例 10.iv(a)においては直訳より役割語のシフトを優先したともいえる。

微視的コミュニケーションのレベルで物語の中で注目されるのは、例 10.v のように、ヒロインが主人公の言葉遣いの変化を喚起するために「武士ことば」を使用する場面がある。翻訳版では常に一人称代名詞の *eu* を用いるヒロインのセリフに *esta serva*⁸ という表現が見られる。これも役割語に対応する手法と考えられる。さらに、敬称の *senhorito* という形も注目に値する。

原作ではヒロインが主人公を呼び捨てで呼んでいるが、翻訳版ではこの敬称の形が現れている。翻訳版で見られる敬称の *senhorita* は主人公が使う「武士ことば」に対応する手法の一つとして働くと考えられる。そのため、原作ではヒロインが「武士ことば」を使うことに対して翻訳版では敬称の *senhorito* という表現でそれに対応していると考えられる。

ここで興味深いのは、この *senhorito* という単語である。敬称の *senhorita* という単語の場合は指小辞「-ita」が敬称の *senhora* に付けられた単語⁹で、未婚の女性に対して使われる敬称である。一方で、一般的に男性に対して使う敬称として *senhor* という単語があるが、翻訳版に見られる *senhorito* という形式は様々な辞書で調べても、単語として挙げられていない¹⁰存在しない語なのである。

⁸ 語形変化によって、(*este* (男性) => *esta* (女性))、(*servo* (男性) => *serva* (女性)) のように女性の形式が表されている。

⁹ *Dicionário Houaiss da língua portuguesa*. (2009: p.1728)

¹⁰ *Dicionário Houaiss da língua portuguesa*. (2009)、*Novo dicionário Aurélio da língua portuguesa*. 4.ed. (2009)、*Dicionário de usos do Português do Brasil*. (2002)、*Michaelis*:

Coelho & Santos (2008) で指摘されるように、指小辞の使用は新しい単語を作る表現力のある手法の一つと見なされる (2008: p.149)。その意味で、ブラジル・ポルトガル語に存在する *senhorita* という敬称に対応するような形での翻訳者による造語が *senhorito* という単語であると考えられる。このことによって、読者に違和感を与えることができると考えられ、この違和感によって、さらにヒロインのセリフで用いられる独特の言葉遣いが強調されるのできると考えられる。ここでも翻訳の仕組みによって、翻訳が原作に起こる役割語のシフトを表現していると考えられる。

以上のように、『るろうに剣心-明治剣客浪漫譚-』に見られる「武士ことば」の役割語はブラジル・ポルトガル語の翻訳版では独特な自己表現や敬称、造語などが対応していることが明らかになった。それは物語の一部が曖昧にならないために、このような役割語の対応が必要になるからである。

5. おわりに

今回の調査では「武士ことば」が現れる作品のブラジル・ポルトガル語の翻訳を考察した。巨視的コミュニケーションと微視的コミュニケーションの観点で、作品の中では役割語が物語と緊密に繋がっている。そのため、翻訳の際、役割語は無視することのできない要素になっていると考えられる。

今後の課題としては、「武士ことば」だけでなく、他の様々の役割語の翻訳手法もより深く考察することが考えられる。それらの手法を明らかにすることによって、役割語の性質をより詳しく理解することもでき、これまでの日本語の翻訳において見られた様々な障害を解決に導くことが可能となるであろう。

moderno dicionário da língua portuguesa. (1998)、*Dicionário contemporâneo da Língua Portuguesa* Caldas Aulete. Volume V. 3.ed. (1980) が参考になる。

参考文献

- 岩田美穂（2014）「ぬ | ん（助動詞）」金水〔編〕『役割語小辞典』研究社 pp.146-147
- 岩田美穂（2014a）「おぬし | 御主（代名詞）」金水〔編〕『役割語小辞典』研究社 pp.50-51
- ウスティノフ・ミカエル（2003, 2007）服部雄一郎〔訳〕（2008）『翻訳-その歴史・理論・展望』白水社
- 菊澤季生（1933）『国語位相論』明治書院
- 金水敏（2000）「役割語深求の提案」佐藤喜代治〔編〕『国語論第 8 集 国語史の新視点』明治書院 pp.311-351
- 金水敏（2003）『ヴァーチャル日本語役割語の謎』岩波書店
- 金水敏（2007）「近代マンガの言語」金水敏〔編〕『役割語研究の地平』くろしお出版 pp.97-108
- 金水敏（2010）「「男ことば」の歴史-「おれ」「ぼく」を中心に」中村桃子〔編〕『ジェンダーで学ぶ言語学』世界思想社 pp.35-49
- 金水敏（2011）「翻訳における制約と創造性—役割語の観点から—」杉藤美代子〔編〕『音声文法』くろしお出版 pp.169-180
- 金水敏〔編〕（2014）『役割語小辞典』研究社
- 金水敏（2014a）「せっしゃ | 拙者（代名詞）」金水敏〔編〕『役割語小辞典』研究社 pp.110-111
- 金水敏（2014b）「役割語とは何か—この辞典を利用する前に」金水敏〔編〕『役割語小辞典』研究社 pp.v-xvii
- 金水敏（2014c）「ん | ん（助動詞）」金水敏〔編〕『役割語小辞典』研究社 pp.214-215
- 滝浦真人（2008）『ポライトネス入門』研究社
- 田中章夫（1999）『日本語の位相と位相差』明治書院
- 中村桃子（2013）『翻訳がつくる日本語』白澤社
- 松井豊・上瀬由美子（2007）『心理学入門コース 5 社会と人間関係の心理学』岩波書店
- 山口治彦（2007）「役割語の個性と普遍性-日英の対照を通して-」金水敏〔編〕『役割語研究の地平』くろしお出版 pp.9-25
- 山口治彦（2011）「役割語のエコロジー」金水敏〔編〕『役割語研究の展開』くろしお出版 pp.27-47
- 吉村和真（2007）「近代マンガの身体」金水敏〔編〕『役割語研究の地平』くろしお出版 pp.109-122
- BAGNO, Marcos. (2015). *Preconceito linguístico* (56th ed.). Parábola breve: Vol. 6. Parábola editorial.
- COELHO, S. M. ; SANTOS, Agenor Gonzaga dos. (2008) *Uma reflexão acerca do emprego do sufixo diminutivo no Português do Brasil*. Revista Alpha, UFMG. (9) pp. 149-157
- LEITÃO, Luiz Ricardo. (2007) *Gramática Crítica - O culto e o coloquial no português brasileiro*. Oficina do Autor.
- MUNDAY, Jeremy. (2016) *Introducing translation studies: theories and applications*. (4.ed.) . Routledge

参考資料

和月伸宏（1994）『るろうに剣心-明治剣客浪漫譚-』第2巻 集英社
WATSUKI、Nobuhiro.（1994）Luiz Kobayashi 〔訳〕（2012）*Rurouni Kenshin- Crônicas da era Meiji*. Volume 2. Editora JBC

辞書

岩波書店（2008, 2009）『広辞苑 第六版』電子版
Companhia Melhoramentos（1998）*Michaelis: Moderno dicionário da língua portuguesa*.
Editora Ática（2002）*Dicionário de usos do Português do Brasil*.
Editora Delta S.A.（1980）*Dicionário contemporâneo da Língua Portuguesa Caldas Aulete*.
Volume V.（3.ed.）
Editora Positivo（2009）*Novo dicionário Aurélio da língua portuguesa*.（4.ed.）
Objetiva（2009）*Dicionário Houaiss da língua portuguesa*.

凡例

1=First person 一人称／**3**= Third person 三人称／**ADJ**= Adjectiv 形容詞／**ART**=Article 冠詞／**AUX**=Auxiliary Verb 補助動詞／**CONJ**= Conjunction 接続詞／**COND**= Conditional 条件法／**IMP**= Imperative 命令法／**INF**= Infinitive 不定詞／**NEG**= Negative 否定辞／**PST**= Past 過去／**PREP**= Preposition 前置詞／**PROG**= Progressive 継続相／**REF.PRO**= Reflexive pronoun 再帰代名詞／**sg**= Singular 単数／**pl**= Plural 複数